

いじめと学力

— TIMSS2011 中学生データの計量分析から —

須藤 康介*

要 約

本稿では、国際学力調査 TIMSS2011 の日本の中学2年生データから、いじめの実態の量的把握と、学力といじめの関連についての分析を行った。分析の結果、主に以下の三点の知見が得られた。第一に、いじめ被害はからかいが最も多く、次いで暴力が多い。第二に、学力といじめにはそれほど強い関連はないが、仲間はずれ・デマ・盗難については、学力の低い生徒のほうがやや受けやすい傾向がある。そして第三に、学校の学力水準といじめには明確な関連がなく、高学力校/低学力校だからいじめが多い/少ないということはない。

キーワード: いじめ, 学力, ヴァルネラビリティ, 学校選択, TIMSS

1. 問題設定

本稿の目的は、国際学力調査 TIMSS2011 の中学2年生データから、いじめの実態の量的把握と、学力といじめの関連についての分析を行うことである。

これまでいじめに関する研究は数多くなされてきたが、日本全国を対象とした信頼性の高い大規模調査データに基づく計量分析は、森田ほか(1999)などの一部の例外を除いて極めて少ない。特に学力といじめの関連については、言説レベルでは数多く言及されているにもかかわらず、学術的な分析はほとんどなされていない。加野(2011)は、高学力層は同級生から「妬み」を買って、いじめを受けやすいことを示唆している。しかし逆に、学校では学業成績に価値が置かれるため、勉強が苦手な生徒が同級生から見下されるという、低学力層がいじめを受けやすいとする議論も成立し得る。両者とも論理的にはあり得ることであるが、学力といじめの関係が実際にはどうなってい

るのかを実証する必要がある。

文部省が示した「いじめは誰にでも起こり得る」という認識が浸透して久しい⁽¹⁾。しかし、それはあくまで「いじめの被害者は固定的ではない」「いじめは集団の力学によって生じる」という意味であって、必ずしも「いじめが他の変数と関連をもたない」ことを意味するわけではないだろう。学力が高いこと、あるいは低いことが、竹川(1993)の指摘する一種のヴァルネラビリティ(攻撃誘発性)として機能している可能性はないのだろうか。

そして、学力に着目するとき、生徒本人の学力に加えて、学校の学力水準にも目を配ることが重要となる。日本全国の中学校は学力面で決して均等ではない。公立・国立・私立中学校の差はあるし、多数を占める公立中学校の中でも地域差が無視できない程度に存在している。河村(2007)は、荒れた学級ほどいじめが多いという結果を示しているが、高学力校と低学力校という学校文化の違いによっても、いじめの発生状況が異なる可能性はないのだろうか。この点も、従来の研究で検証されてこなかった課題である。学校による差は、中学受験や学校選択制を利用しようとする児童や

2013年11月30日受付

* 江戸川大学 現代社会学科非常勤講師 教育社会学

保護者にとっても、関心の高いことだろう。

中富(2006)が指摘するように、いじめは子どもの世界においても「人権侵害」に当たる許されざる行為である。学校教育の達成目標の中心とされる学力と、いじめ被害の関係を明らかにすることは、いじめの実態把握という意味でも、学校という社会集団内での学力のもつ意味を検討するという意味でも重要となると考えられる。

2. 使用データと変数

前述のように、本稿で分析に使用するデータは、IEA(国際教育到達度評価学会)が4年おきに実施している「国際数学・理科教育動向調査」の2011年調査、通称TIMSS2011の中学2年生データである⁽²⁾。TIMSS2011は、2010年度の学年末に日本全国から無作為抽出された小学4年生と中学2年生の学級において実施され、中学2年生に関する調査は、数学と理科の教育到達度調査・生徒質問紙・教師質問紙・学校質問紙で構成されている。最終的な有効回答数は生徒4414名、教師332名、学校138校である。1校あたり1学級が抽出されている。

これほど大規模で信頼性の高い標本抽出が行われており、生徒の属性やいじめ状況についての質問項目が含まれている学力調査は、現時点においてTIMSSの他には存在しないだろう。また、中学2年生対象であるため、「新生入生」や「受験生」としての特殊性が存在せず、ある意味で「一般的」な中学校生活の実態を把握することができる。さらに、生徒レベル変数と学校レベル変数を組み合わせたマルチレベル分析を行うことができるのも、調査設計上の大きな特長である。なお、本稿のすべての分析において、IEA設定の総合ウェイト(平均1に換算)を用いて、標本バイアスの補正を行っている。

いじめに関する質問項目は、「この学年になって、学校で、次のようなことがどのくらいありましたか」と尋ねられ、「私はからかわれたり、悪口を言われた」「私は何かをするとき、仲間はずれにされた」「だれかが私について、うそを言

いふらした」「私のものが盗まれた」「私は他の生徒から危害を加えられた(おす、たたく、ける、など)」「私はやりたくないことを他の生徒にやらされた」の6項目が挙げられている。個別性を重視してそれぞれを単独で分析する手法と、総体としてのいじめ被害度に着目して縮約して分析する手法を併用する。

学力については、まず数学と理科それぞれについて、第1推算値から第5推算値の平均をとり、一元的なスコアを作成する。TIMSSの国内外の報告書でも、このように算出されたスコアが掲載されている。そして、数学と理科のスコアの平均をとり、それを便宜的に国内偏差値に換算したものを「学力偏差値」として用いる。TIMSSの性質上、理数系に特化した指標となっているが、理数系学力と文科系学力が高い相関にあることをふまえれば、教科指導に関する分析を行わなければ、学力全般に近似させることも可能だろう。TIMSSで測定された学力をどのように見なすのかについては、須藤(2013)で詳細に論じている。

3. いじめの実態把握

本節では、先行研究の知見の確認という意味も含め、中学生のいじめ被害の実態について、様々な視角から分析を加える。

3.1. いじめ被害の実数

いじめ被害の度数分布を表1に、各選択肢を年間回数に換算して求めた記述統計量を表2に示す。年間回数への換算は、「1回もない」を0回、「年に2回か3回くらい」を2.5回、「月に1回か2回」を18回、「少なくとも週に1回」を60回とした⁽³⁾。

表1および表2より、いじめは「からかい」が最も多く、次いで「暴力」(軽度の叩きなども含む)となっている。「盗難」という犯罪に類するものはほとんど行われていない。「仲間はずれ」については日本に特徴のないいじめとされることもあるが、今回の調査では、他のいじめと比べて特別に多いわけではないという結果になっている。なお、

表1 いじめ被害の度数分布

	少なくとも週1回	月に1回か2回	年に2回か3回くらい	1回もない	有効度数
[からかい] 私はからかわれたり、悪口を言われた	16.3%	20.3%	29.4%	34.0%	4370
[仲間はずれ] 私は何かをするときに、仲間はずれにされた	2.7%	5.4%	20.4%	71.5%	4367
[デマ] だれかが私について、うそを言いふらした	4.0%	8.2%	26.1%	61.7%	4367
[盗難] 私のものが盗まれた	1.2%	2.5%	13.6%	82.7%	4361
[暴力] 私は他の生徒から危害を加えられた	8.5%	9.2%	15.8%	66.5%	4362
[無理強い] 私はやりたくないことを他の生徒にやらされた	1.9%	5.6%	16.7%	75.8%	4365

表2 いじめ被害の記述統計量

	最小値	最大値	平均値	標準偏差	有効度数
[からかい] 私はからかわれたり、悪口を言われた	0	60	14.150	21.288	4370
[仲間はずれ] 私は何かをするときに、仲間はずれにされた	0	60	3.091	10.293	4367
[デマ] だれかが私について、うそを言いふらした	0	60	4.535	12.337	4367
[盗難] 私のものが盗まれた	0	60	1.484	6.951	4361
[暴力] 私は他の生徒から危害を加えられた	0	60	7.150	16.902	4362
[無理強い] 私はやりたくないことを他の生徒にやらされた	0	60	2.543	8.950	4365

同じく近年の調査である生徒指導・進路指導研究センター編（2013）では、「仲間はずれ」が「からかい」と同等に多いという結果が得られているが、これはサンプリング対象や質問項目のワーディングが異なるためと考えられる。いじめは「どこからがいじめか」という境界が本人の主観に依存するため、万人に適合するいじめの質問文を作成することは難しい。したがって、微妙なワーディングの違いによって、結果に差が出るという点には注意が必要だろう。

3.2. いじめ被害の構造

次に、いじめ被害どうしの相関係数を表3に示す。相関係数の算出にあたっては、表2と同様に年間回数に換算した値を用いた。

表3から、「からかい」と「デマ」、「からかい」と「暴力」、「仲間はずれ」と「デマ」の相関が相対的に大きいことが分かる。これらのうちで「からかい」「デマ」「仲間はずれ」は、内藤（2007）の言うコミュニケーション操作系のいじめであり、セットで行われる傾向があることが窺える。「暴力」は悪ふざけとも言うべき軽度の暴力と、

表3 いじめ被害の相関関係（相関係数）

	からかい	仲間はずれ	デマ	盗難	暴力	無理強い
からかい	1.000	0.397	0.425	0.193	0.493	0.334
仲間はずれ	0.397	1.000	0.466	0.287	0.279	0.330
デマ	0.425	0.466	1.000	0.317	0.345	0.329
盗難	0.193	0.287	0.317	1.000	0.257	0.274
暴力	0.493	0.279	0.345	0.257	1.000	0.389
無理強い	0.334	0.330	0.329	0.274	0.389	1.000

※ すべての相関係数が0.1%水準で有意である。

表4 いじめ被害指標の縮約 (カテゴリカル主成分分析)

		数量化	成分負荷量
[からかい] 私はからかわれたり、悪口を言われた	少なくとも週1回 月に1回か2回 年に2回か3回くらい 1回もない	1.871 0.546 - 0.233 - 1.017	0.765
[仲間はずれ] 私は何かをするときに、仲間はずれにされた	少なくとも週1回 月に1回か2回 年に2回か3回くらい 1回もない	3.452 2.270 0.924 - 0.564	0.721
[デマ] だれかが私について、うそを言いふらした	少なくとも週1回 月に1回か2回 年に2回か3回くらい 1回もない	3.062 1.855 0.521 - 0.664	0.741
[盗難] 私のものが盗まれた	少なくとも週1回 月に1回か2回 年に2回か3回くらい 1回もない	4.951 3.345 1.472 - 0.412	0.549
[暴力] 私は他の生徒から危害を加えられた"	少なくとも週1回 月に1回か2回 年に2回か3回くらい 1回もない	2.469 1.408 0.492 - 0.626	0.742
[無理強い] 私はやりたくないことを他の生徒にやらされた	少なくとも週1回 月に1回か2回 年に2回か3回くらい 1回もない	3.749 2.519 1.057 - 0.510	0.723
寄与率			50.5%

犯罪に類する重度の暴力に区分されるべきだが、おそらく「からかい」は軽度の暴力と関連しているのではなからうか。

ここまで6項目のいじめ被害について見てきた。しかし、それぞれのいじめの個別性に注目することも重要だが、その生徒がいじめを総体としてどれほど受けているか、または学校にいじめがどれほど蔓延しているかを把握する上で、いじめ指標を一つに縮約することも重要だろう。そのためにカテゴリカル主成分分析を行った結果が表4である。

この分析で、総体としてのいじめ被害の程度を表す一元的な尺度が得られた。なお、第2成分まで算出したところ、第2成分は寄与率が13.4%と小さく、いじめ被害は概ね一つの尺度に縮約されることが確かめられた。いじめの内実は様々であるが、それらを包括する一つはいじめ被害指標が存在しているということである。以後の分析では、得られた主成分得点を偏差値化した「いじめ被害

偏差値」を適宜用いる。

3.3. 学校による差異

本節の最後に、学校によるいじめ蔓延度の差を確認する。分散分析によって、いじめ被害偏差値の分散を学校内分散と学校外分散に分解した結果を表5に示す。また、いじめ被害偏差値の学校平均の分布（ヒストグラム）を図1に示す。

表5より、いじめ被害は学校間分散よりも学校内分散のほうが大きいことが分かる。当然のことかもしれないが、学校差よりも個人差のほうが圧倒的に大きい。とは言うものの、図1に示したように、学校による差も無視できない程度に存在している。すなわち、いじめがあまりない学校もあれば、いじめが蔓延している（平均偏差値が60に近い）学校もある。国際比較を行った森田ほか（2001）によれば、日本のいじめは教室内で行われることに特徴があるが、その教室の雰囲気为学校によって異なっていることが推察できる。

表5 いじめ被害偏差値の分散分析

全分散	100.000
学校内分散	94.861
学校間分散	5.532

※データが欠損している学校があるため、学校内分散と学校間分散の和が全分散に一致しない。

4. 学力といじめの関連

本節では、これまでの研究で焦点を当てられてこなかった学力といじめの関連について分析を行う。その際、「生徒の学力」（生徒個人の学力）と「学校の学力水準」（その学校に通っている生徒の学力の平均値）を区別して、いじめとの関連を分析する。

4.1. 生徒の学力といじめ被害

生徒の学力（均等5段階）ごとのいじめ被害を表6に示す。平均値の算出にあたっては、表2と同様に年間回数に換算した値を用いた。以後の分析すべてで同様である。

表6より、いじめ全体としては、学力とほぼ無相関であることが分かる。学力上位層や下位層がいじめを受けやすいわけでも、ほどほどの中位層がいじめを受けにくいわけでもない。個別に見ると、「盗難」のみが学力下位層のほうが受けやすい傾向が見て取れる。加害者が盗難をしようとするとき、標的にしやすいという理由があるのかもしれない。もっとも、この分析だけでは、他の変数による擬似相関や擬似無相関の可能性が否定で

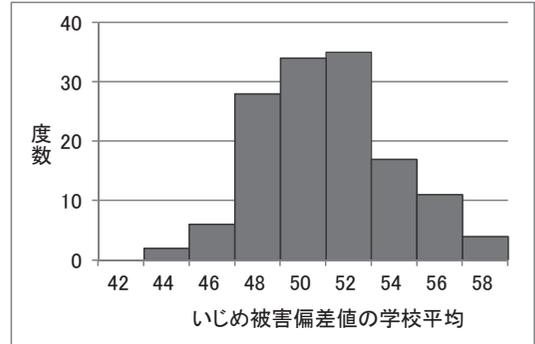


図1 いじめ被害偏差値の学校平均の分布

きない。

4.2. 学校の学力水準といじめ被害

次に、学校の学力水準ごとのいじめ被害を分析する。前述のように、日本全国の中学校は学力面において決して均等ではない。主に高校段階に焦点を当てた教育社会学のトラッキング研究が示してきたように、同じ教育段階の学校においても、生徒の学力水準によって学校文化はかなり異なる。そこで、生徒の学力偏差値の平均値によって、学校を高学力校と中学力校と低学力校に区分し、その区分ごとのいじめ被害を表7に示す。

表7より、生徒個人の学力に着目した場合と同様、いじめ全体としては、学校の学力水準とほぼ無相関であることが分かる。そして個別に見ると、「盗難」のみが低学力校で多い傾向が見て取れる。しかし、これも表6と同様に、他の変数による擬似相関や擬似無相関の可能性が否定できないため、次項で、より詳細に因果関係に接近することとする。

表6 生徒の学力ごとのいじめ被害（平均値）

		いじめ被害 偏差値	からかい	仲間はずれ	デマ	盗難	暴力	無理強い
生徒の学力	最上位	50.715	15.702	2.773	4.278	1.358	7.934	2.471
	上位	49.883	14.810	2.853	4.297	0.850	7.021	2.183
	中位	49.750	13.610	2.776	4.536	1.364	6.648	2.982
	下位	50.100	13.376	3.487	4.444	1.568	7.753	2.683
	最下位	49.571	13.304	3.557	5.111	2.277	6.413	2.392
有意確率						***		
有効度数		4351	4370	4367	4367	4361	4362	4365

(*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05)

表7 学校の学力水準ごとのいじめ被害（平均値）

		いじめ被害 偏差値	からかい	仲間はずれ	デマ	盗難	暴力	無理強い
学校の 学力水準	高学力校	49.669	13.461	3.126	4.526	1.058	6.380	2.174
	中学力校	50.140	14.564	3.049	4.548	1.225	7.524	2.522
	低学力校	50.180	14.402	3.098	4.530	2.160	7.521	2.923
有意確率						***		
有効度数		4351	4370	4367	4367	4361	4362	4365

(*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05)

4.3. いじめの規定要因分析

いじめ被害偏差値、およびそれぞれのいじめ被害を従属変数とするマルチレベル回帰分析の結果を表8～14に示す。なお、独立変数として投入している女子ダミーは性別が女子であることを表し、月齢は月単位の生徒の年齢であり、マイノリティ出身ダミーは両親のいずれかまたは両方が外国生まれであることを表し、文化資本スコアは家庭の文化的所有物の多寡に基づく標準化得点（平均0、標準偏差1）である⁽⁴⁾。そして、経済的困難率は学校が回答した「経済的に恵まれない家庭の生徒」のパーセントであり、経済的余裕率は同じく「経済的に恵まれた家庭の生徒」のパーセントであり、学年規模はその学校の中学2年生の生徒数（100人単位）である。これらの効果を統制することで、生徒の学力および学校の学力水準がいじめに与える正味の効果に接近できるだろう⁽⁵⁾。

表8より、いじめ全体としては、やはり生徒の学力とも、学校の学力水準ともほとんど関連しないことが分かる。本人の学力が高かろうが低かろうが、高学力校であろうが低学力校であろうが、いじめを受けるリスクはさほど変わらない。また、地域の経済状況や学年規模もほとんど関連しない。なお、女子ダミーと文化資本スコアは統計的に有意であり、いじめは男子および文化階層の高い生徒が受けやすいということは確認できる。

しかし、表9～14でいじめを個別に見てみると、若干様相が異なる。すなわち、学校の学力水準がほとんど関連しないことは同様であるが、いくつかのいじめについて、生徒本人の学力が関連している。具体的には、「仲間はずれ」「デマ」「盗難」については、学力の低い生徒のほうが受けやすい傾向がある。回帰係数がそれほど大きくないことから、過度の解釈は慎むべきであるが、弱い傾向

表8 いじめ被害偏差値の規定要因（マルチレベル回帰分析）

		回帰係数	有意確率
生徒レベル	女子ダミー	-3.943	***
	月齢	-0.009	
	マイノリティ出身ダミー	1.396	
	文化資本スコア	0.552	***
	学力偏差値	0.001	
学校レベル	経済的困難率	-0.025	
	経済的余裕率	-0.009	
	学年規模（100人単位）	0.479	
	学力偏差値の学校平均	-0.087	
(定数)		57.723	***
残差分散：生徒レベル		91.156	
残差分散：学校レベル		4.577	
有効度数		4005 / 127	

(*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05)

表9 からかいの規定要因 (マルチレベル回帰分析)

		回帰係数	有意確率
生徒 レベル	女子ダミー	-6.679	***
	月齢	-0.030	
	マイノリティ出身ダミー	1.531	
	文化資本スコア	0.762	*
	学力偏差値	0.059	
学校 レベル	経済的困難率	-0.006	
	経済的余裕率	-0.007	
	学年規模 (100人単位)	0.063	
	学力偏差値の学校平均	-0.216	
(定数)		30.687	
残差分散：生徒レベル		421.932	
残差分散：学校レベル		13.883	
有効度数		4023 / 127	

(***) p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05)

表10 仲間はずれの規定要因 (マルチレベル回帰分析)

		回帰係数	有意確率
生徒 レベル	女子ダミー	-0.630	*
	月齢	-0.080	
	マイノリティ出身ダミー	1.038	
	文化資本スコア	0.312	
	学力偏差値	-0.065	***
学校 レベル	経済的困難率	-0.029	
	経済的余裕率	0.000	
	学年規模 (100人単位)	-0.012	
	学力偏差値の学校平均	0.014	
(定数)		20.376	*
残差分散：生徒レベル		103.817	
残差分散：学校レベル		1.610	
有効度数		4021 / 127	

(***) p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05)

表11 デマの規定要因 (マルチレベル回帰分析)

		回帰係数	有意確率
生徒 レベル	女子ダミー	-2.697	***
	月齢	0.038	
	マイノリティ出身ダミー	0.120	
	文化資本スコア	0.282	
	学力偏差値	-0.054	*
学校 レベル	経済的困難率	0.005	
	経済的余裕率	-0.008	
	学年規模 (100人単位)	0.184	
	学力偏差値の学校平均	0.085	
(定数)		-2.398	
残差分散：生徒レベル		148.236	
残差分散：学校レベル		1.513	
有効度数		4020 / 127	

(***) p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05)

表12 盗難の規定要因 (マルチレベル回帰分析)

		回帰係数	有意確率
生徒 レベル	女子ダミー	-1.633	***
	月齢	-0.021	
	マイノリティ出身ダミー	-0.004	
	文化資本スコア	0.009	
	学力偏差値	-0.040	***
学校 レベル	経済的困難率	-0.003	
	経済的余裕率	-0.007	
	学年規模 (100人単位)	0.117	
	学力偏差値の学校平均	-0.029	
(定数)		9.502	
残差分散：生徒レベル		44.391	
残差分散：学校レベル		0.412	
有効度数		4015 / 127	

(***) p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05)

表13 暴力の規定要因 (マルチレベル回帰分析)

		回帰係数	有意確率
生徒 レベル	女子ダミー	-6.716	***
	月齢	-0.084	
	マイノリティ出身ダミー	1.419	
	文化資本スコア	0.611	*
	学力偏差値	0.009	
学校 レベル	経済的困難率	0.006	
	経済的余裕率	-0.015	
	学年規模 (100人単位)	0.626	
	学力偏差値の学校平均	-0.031	
(定数)		25.582	
残差分散：生徒レベル		267.084	
残差分散：学校レベル		6.856	
有効度数		4016 / 127	

(***) p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05)

表14 無理強いの規定要因 (マルチレベル回帰分析)

		回帰係数	有意確率
生徒 レベル	女子ダミー	-1.524	***
	月齢	-0.042	
	マイノリティ出身ダミー	2.231	*
	文化資本スコア	0.219	
	学力偏差値	-0.004	
学校 レベル	経済的困難率	-0.009	
	経済的余裕率	-0.009	
	学年規模 (100人単位)	0.209	
	学力偏差値の学校平均	-0.036	
(定数)		12.633	
残差分散：生徒レベル		78.706	
残差分散：学校レベル		1.125	
有効度数		4018 / 127	

(***) p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05)

として、これらのいじめは学力下位層が受けやすい。なお、本稿の主題からは外れるが、「無理強い」のみはマイノリティ出身者が受けやすい。あるいは、マイノリティ出身の生徒のほうが「無理強い」されていると感じやすいとも考えられる。

5. 結 論

本稿で得られた主な知見は以下の三点である。第一に、いじめ被害は「からかい」が最も多く、次いで「暴力」（軽度の叩きなども含む）となっている。「盗難」についてはほとんど行われていない。「からかい」「デマ」「仲間はずれ」は特に相関している。第二に、いじめ全体として見た場合、生徒の学力といじめにはほとんど関連がないが、「仲間はずれ」「デマ」「盗難」については、学力の低い生徒のほうがやや受けやすい傾向がある。第三に、いじめ全体として見ても、個別に見ても、学校の学力水準といじめには明確な関連がなく、高学力校／低学力校だからいじめが多い／少ないということはない。学校によっていじめの蔓延度に差があることは事実だが、それは単純に学校の学力水準によって説明できるものではない。

学力が低い生徒がいじめをやや受けやすいということは、低学力が一部のいじめのヴァルネラビリティになっている可能性を示唆する。低学力の生徒への支援は、進学や就職といった文脈以外でも重要となるということである。また、学校の学力水準といじめ被害にほとんど関連がなかったことから、中学受験や学校選択制の文脈でしばしば議論される「高学力校のほうが、いじめが少ない」あるいはそれに対する反論としての「むしろ高学力校のほうが、いじめが多い」という指摘が、どちらも的を射ていないことが分かる。さらに言えば、今回の分析で、統計的に有意な効果が認められた学校レベル変数は一つも存在しなかった。今回分析したようなハードな要因ではなく、教師集団の取り組みといった、よりソフトな要因によって、その学校のいじめ蔓延度が左右されるのではなかろうか。学力調査の結果や地域の経済状況などの目につきやすい要素で「この学校はいじめが

多そうだ／少なそうだ」と判断することは適切ではない。これは学校選択制を利用する保護者への重要な示唆となるだろう。

本稿の限界は、いじめを被害者側の視点のみで分析している点にある。すなわち、学力といじめ被害の関係は扱っているのに対して、学力といじめ加害の関係については扱っていない。滝(1992)がいじめの原因について(加害者の)「不適応仮説」を有力な理論として提示していることをふまえると、学力といじめ加害の関係を検証することも意義があることだろう。学力といじめという、これまで別領域として研究されていたものを結節させた点に本稿の意義があるが、引き続き広範な研究が求められる。

《注》

- (1) 「いじめは誰にでも起こり得る」というフレーズは、1996年の文部省緊急アピールの中で「深刻ないじめは、どの学校にも、どのクラスにも、どの子どもにも起こりうる」と記されたことを契機に広がった。現在では、国政レベルでも教育委員会レベルでも市民団体レベルでも、いじめについて言及するときに頻繁に用いられるフレーズである。
- (2) TIMSS2011の調査データやコードブックは、TIMSS & PIRLSの公式ホームページ (<http://timss.bc.edu/>) からダウンロードできる。調査設計の詳細はMartinほか(2013)に、日本に関する調査報告は国立教育政策研究所編(2013)にまとめられている。
- (3) TISS2011では、いじめの頻度を尋ねている一方で、深刻さについては尋ねていない。すなわち、同じ「からかい」が「月に1回か2回」でも、軽い冗談のような「からかい」が月に1～2回であるのか、人格否定的な耐えがたい苦痛を伴う「からかい」が月に1～2回であるのかは判別できない。本稿の分析はあくまでいじめの量的側面を扱っている。
- (4) 文化資本スコアの作成はカテゴリカル主成分分析で行った。分析結果を表15に示す。なお、両親学歴を用

表15 文化資本スコアの作成(カテゴリカル主成分分析)

		数量化	成分負荷量
蔵書数	0～10冊	-1.726	0.696
	11～25冊	-0.690	
	26～100冊	0.144	
	101～200冊	1.026	
	200冊以上	1.367	
インターネットの有無	あり	0.406	0.555
	なし	-2.464	
地球儀の有無	あり	1.281	0.698
	なし	-0.781	
寄与率		42.6%	

いなかったのは、欠損が1753名(39.7%)に及ぶため、分析に用いると標本バイアスを避けられないと判断したためである。

- (5) マルチレベル回帰分析の中にも様々な手法の種類があるが、本稿では、ランダム切片モデルを採用した。ランダム切片モデルとは、生徒レベル変数の回帰係数に学校間分散を仮定しないモデルである。なお、回帰係数の推定は最尤法に基づく。

参考文献

- M.O.Martin and I.V.S.Mullis (ed) , 2013, *Methods and Procedures in TIMSS and PIRLS 2011*, Boston College.
- 加野芳正 .2011, 『なぜ、人は平気で「いじめ」をするのか? - 透明な暴力と向き合うために』日本図書センター。
- 河村茂雄 .2007, 『データが語る① 学校の課題-学力向上・学級の荒れ・いじめを徹底検証』図書文化社。
- 国立教育政策研究所編 .2013, 『TIMSS2011 算数・数学教育の国際比較-国際数学・理科教育動向調査の2011年調査報告書』明石書店。
- 国立教育政策研究所編 .2013, 『TIMSS2011 理科教育の国際比較-国際数学・理科教育動向調査の2011年調査報告書』明石書店。
- 須藤康介 .2013, 『学校の教育効果と階層-中学生の理数系学力の計量分析』東洋館出版。
- 生徒指導・進路指導研究センター編 .2013, 『いじめ追跡調査2010-2012』国立教育政策研究所。
- 滝充 .1992, 「“いじめ”行為の発生要因に関する実証的研究-質問紙法による追跡調査データを用いた諸仮説の整理と検証」『教育社会学研究』第50集, 東洋館出版社, pp.366-388.
- 竹川郁雄 .1993, 『いじめと不登校の社会学-集団状況と同一化意識』法律文化社。
- 内藤朝雄 .2007, 『<いじめ学>の時代』柏書房。
- 中富公一 .2006, 「いじめ概念の憲法的検討-児童・生徒の安全再構築のために」『名古屋大学法政論集』第213号, 名古屋大学大学院法学研究科, pp.77-111.
- 森田洋司編 .2001, 『いじめの国際比較研究-日本・イギリス・オランダ・ノルウェーの調査分析』金子書房。
- 森田洋司・滝充・秦政春・星野周弘・若井彌一編 .1999, 『日本のいじめ-予防・対応に生かすデータ集』金子書房。